

業務拡大を可能とした検体運用と TAT の改善

◎黒島 眞太郎¹⁾、滝口 友理子¹⁾、岡田 卓也¹⁾、河村 道徳¹⁾
JR 広島病院¹⁾

【背景】平成 28 年 1 月の新病院開業に向けて、診療基盤の拡大として人工透析、健診センター、化学療法センターの開設が予定されていた。検体検査では、これまで以上に多くの検体の処理や迅速報告、チーム医療へのさらなる参画が求められることが予想された。

【課題】上記の要求事項を達成するためには、業務の効率化を進め、TAT の改善が必要であると考えた。移転前の TAT 遅延の原因を調査した結果、検体の動線と運用方法に問題があり、機器本来の処理能力を発揮できていなかったことと、免疫検査の反応時間の長さに起因していることが挙げられた。また検体架設渋滞も発生し、技師が架設状況を常に監視しており業務の負担となっていた。

【取り組み内容】①機器の選定は、生化学検査装置は LABOSPECT 006（日立）を 2 台購入した。免疫検査装置は、迅速項目については 18 分という反応時間から cobas e601(Roche)を選定し、迅速項目でないもしくは検査件数の少ない項目についてはルミパルス G1200(富士ビバ)を選定した。②効率的な動線を意識したレイアウトへの見直しに加

えて、前処理分注機を利用し、免疫検査依頼のある検体は、子検体を作成し、生化学検体と免疫検体を同時に架設する運用へと変更した。

【結果】レイアウトと検体運用の見直しにより、動線の短縮、検体の架設渋滞の解消、そこに関わる技師の業務負担も軽減した。生化学の TAT は、総処理能力が 3000 テスト/h から 2000 テスト/h に下がったものの、平均 43 分から 33 分

（10 分短縮）となった。免疫 TAT 平均は、迅速報告対象項目で 59 分から 42 分（17 分短縮）、迅速報告対象でない項目で 59 分から 52 分（7 分短縮）となった。今回の取り組みにおいて、TAT は機器の処理能力のみに依存しているのではなく、動線と検体の運用方法及び免疫の反応時間に依存していたことが確認された。

【結語】今回の取り組みにより、TAT が短縮した上に、検体集中時にも安定した時間で報告が可能になった。また効率的な人の動線を意識したレイアウトと運用により、仕事の負担も軽減され、業務拡大に対応できるようになり、チーム医療へのさらなる参画を可能とした。(082-262-1444)